中国の地方部における環境配慮型観光の現状と課題
～内モンゴル自治区通遼市庫倫旗を事例として～

阿日棍[1]・加藤　哲男[2]

[1]学生会員　名古屋産業大学大学院環境マネジメント研究科（〒488-8711 愛知県尾張旭市新居町山の田3255-5）　E-mail:arukon0407@yahoo.co.jp

[2]正会員　名古屋産業大学教授　〒488-8711 愛知県尾張旭市新居町山の田3255-5）
E-mail:t-kato@nagoya-su.ac.jp

近年、内モンゴルの観光業は人々の所得増加や余暇の拡大、迅速な経済発展の背景下で増大している。内モンゴルの観光資源には森林、砂漠、草原、民族文化、歴史遺産などの多様な資源がある。観光は地域とともに育つものであるので、過去において、観光施設の大規模な開発は、逆に資源の大量消費やごみ問題など、地域にさまざまな環境問題をもたらし持続可能な観光であるとはいえない。エコツーリズムはその環境と観光の共生を考える持続的発展型の新たな概念である。本研究は、内モンゴル自治区通遼市庫倫旗を事例地として、エコツーリズムを推進するための方策を検討することを目的としている。本稿では、その方策の一例としてエコミュージアム方式のサテライト候補地の考察を試みている。

Key Words : *Eco-Tourism, Sightseeing income, The number of tourists, Ecomusium*

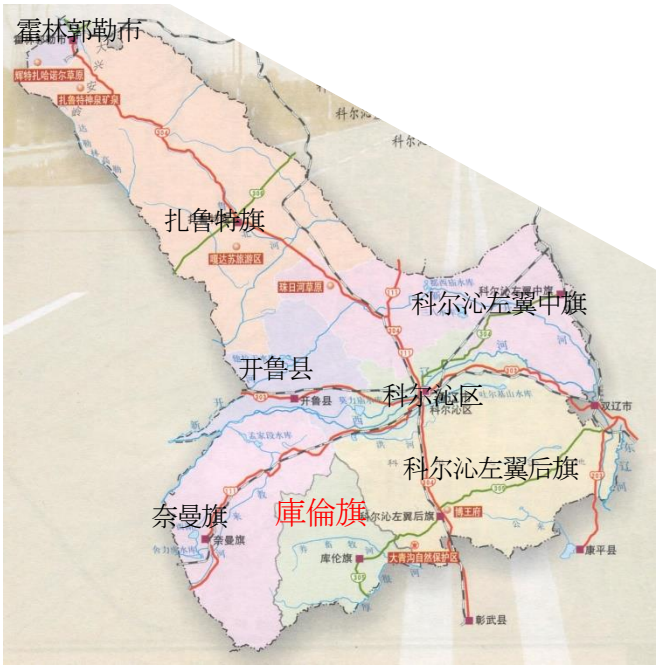
1.　はじめに

中国では、固有の文化を持つ伝統な集落の中には世界遺産に登録されている地域もあり、その多くは有名な観光地になっている。しかし実態を見ると、ほとんどの地域は観光化の影響により、先住民が移転し、自然が破壊され、従来の文化遺産が消失し、伝統的作業様式から新作業様式へ転換するなど、多くの問題に直面している。

本研究では中国の内モンゴル自治区通遼市庫倫旗を事例地として、文化遺産保護政策の変遷を踏まえて、伝統的な生活文化様式を有する地域における住民と政府の関わりを把握し考察するとともに、地域固有の文化・自然・産業資源を現地調査することにより、地域の文化や生活の保護・育成を視点とするエコミュージアム方式の導入方策を検討することを目的とする。

2.　通遼市庫倫旗の概要

庫倫旗（クーロンき、モンゴル語：[illegible]フレーホショウ）は中国内モンゴル自治区通遼市に位置する旗で面積は 4,717 ㎢である。旗とはモンゴル自治区特有の行政区域名称で、モンゴル帝国時代から今日まで使用され続けている。図－１は通遼市の行政区分図に庫倫旗の位置を示したものであるが、通遼市には庫倫旗以外にも四つの旗がある。通遼市の面積は 59,535 ㎢、人口 324 万人（2011）である。北海道をやや下回る面積に北陸三県合計をやや上回る人口が住んでいると考えればよい。庫倫旗の中はさらに 1 街道（庫倫街道）、6 鎮（庫倫鎮、扣河子鎮、白音花鎮、六家子鎮、額勒順鎮、水泉郷鎮）、2 蘇木（茫汗蘇木、先進蘇木）、1 林場（養畜牧林場）に分かれている。人口：17 万 8 千人のうち農業人口は 13 万 8 千人である。モンゴル族が 11 万 4 千人を占め、モンゴル族を主体的に漢族、回族、満族等 11 民族が居住している。



図－１　通遼市行政区分図[1)]

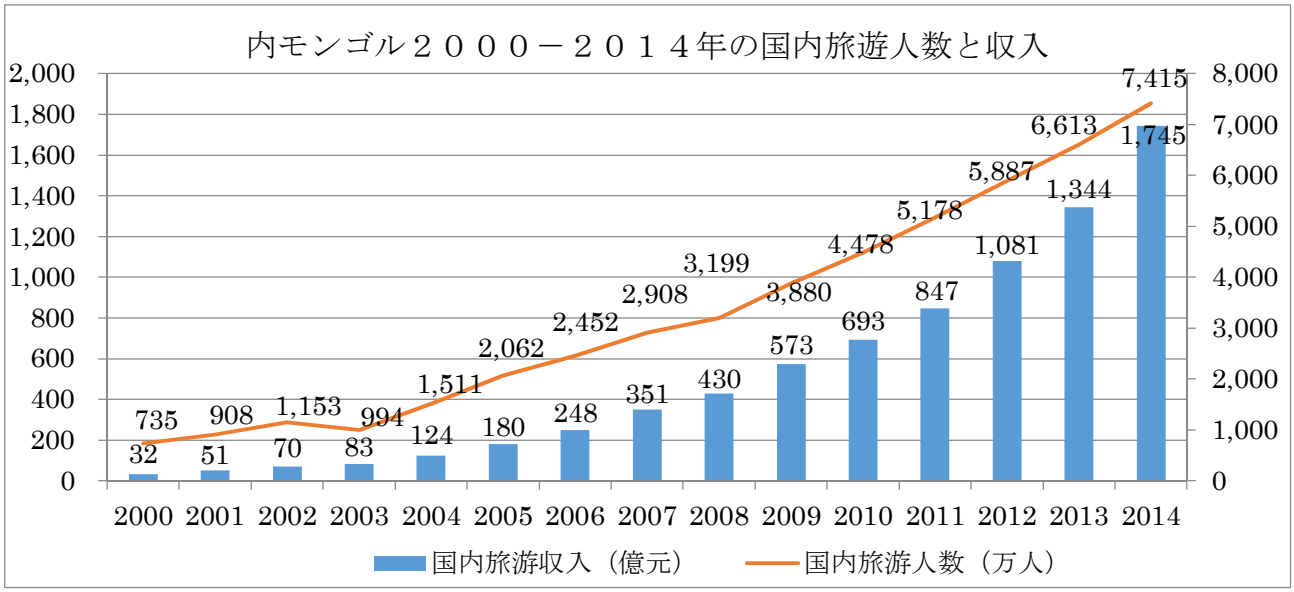
庫論旗で発見された鉱物は 27 種類があり、アルミニウム、亜鉛、カオリン、鉄を含む資源の埋蔵量が豊富にある。庫倫旗は地理、気候、土質などの条件が蕎麦の生産にとても適しており、庫倫旗の主要穀物である。2006 年に「中国蕎麦の郷」として国家原産地商標認証を取得し、内モンゴル自治区第一の名産地商標を登録した農産品である。

３．内モンゴル国内と国際観光の動向

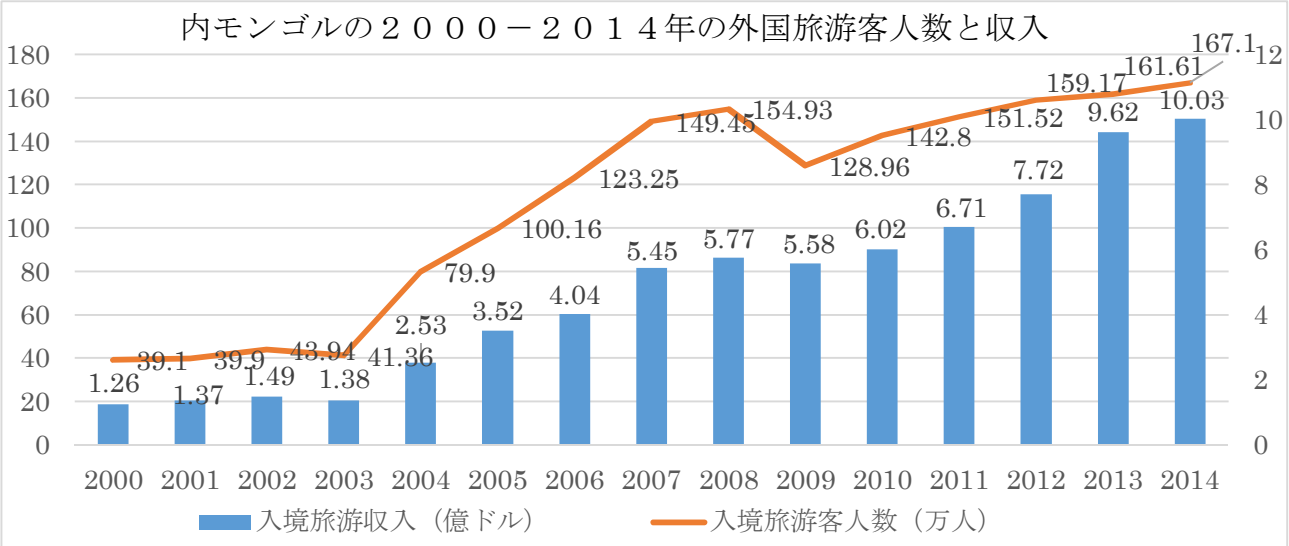
（１）内モンゴル観光の概要

内モンゴル自治区統計局よると、内モンゴル自治区の観光業は急速に発展し、観光収入が年々増加している。国内観光の市場規模は徐々に拡大して、増加速度が速い。内モンゴルの国内観光客の総数が全国平均水準の速度で増加する中で、近年、内モンゴル人民政府は観光業を更に発展させるためにインフラ設備、観光資源開発、観光活動の誘致などを行っている。これは内モンゴル国内観光の形勢が優秀で、内モンゴルの豊富な観光資源は近い将来もっと大勢の観光者を吸引する潜在力をもっていることを表明していると考える。内モンゴルにとって観光産業は雇用の増大、地域の活性化にもつながり、経済や社会発展の重要な役割を果たしている。しかし、中国国内の観光業が発達した他の省と比べると、観光客数や観光から得た収入、また知名度や競争力において、内モンゴルはまだ大きく遅れている。

2000 年の中国西部大開発戦略は民族地域の観光業発展に大きな機会を生じた。内モンゴル政府が西部大開発と振興東北工業基地（赤峰、ホルンベル、シリンゴル、通遼）政策で観光業経済発展による内モンゴル観光業の促進を図ったことにより、観光客数や観光収入が年々増加してきている。



図－２　内モンゴルの国内観光客数と観光収入の推移



図－３　内モンゴルの国際観光客数と観光収入の推移

（２）内モンゴルの観光客数・観光収入の推移

2001 年中国の WTO 加入は民族地域の観光業が良い発展と挑戦の機会であった。

2002年、内モンゴル観光業は突破的な進展を得て、国内外観光人数ははじめて 1000 万人を超え（1196 万人）、観光業総収入は 82.2 億元だった。これはこの年の内モンゴル自治区生産総値の4.75%を占め、巨大な発展潜在力と前景を表した。

2003 年、内モンゴル観光業は SARS の影響を受けたが大きな災害が出てない。海外からの観光客数は 41.36 万人（2002 年と比べると 5.89%低下）、観光外貨収支は 1.38 億ドル（7.４%低下）、国内観光者数は 994 万人で観光収入は 83.29 億元（1.3%増加）。

2004年、中国国内経済の持続増長や内モンゴル経済の快速増長の推進、また観光市場需要の 変化で内モンゴル観光業は新たな突破をした。2003年と比べると、入境観光者数と国内観光者 数はそれぞれ 93.4%と 52%増えた。観光の外貨収入と国内観光の収入はそれぞれ 82.9%と 49% 増えた。内モンゴル観光業は加速発展段階に入った。

2005 年、内モンゴル観光局は海外や国内 での宣伝活動を促進し、五つの大型観光交易会に参加した。その中、国際型の宣伝は 3 回（広州 国際観光交易会、マレーシア、シンガポール国際観光展に参加した）、国内では 2 回（桂林、香港） で内モンゴルの観光資源を有力に宣伝し、また知名度を拡大したのである。この年の入境観光者 数は 100.16 万人、観光から得た外貨収入は 3.52 億ドルで、国内観光者数は 2061 万人、観光収入は 179.72 億元である。

2007 年の 観光客統計データからみると、内モンゴルの国内観光客数は 290.17 万人、海外の観光客数は 149.45 万人で、総収入は 390.77 億元になり、前年と比べると 39.7%増加した。2008 年内モンゴル観光外貨収入のピークに達し、その総収入 5.77 億ドル５%増加した。

2008 年はチベット、四川、甘粛、新疆など の地域にデモが発生したことで、これらの地域に観光客が殆どゼロに近づいたが内モンゴル自治 区は比較的に政治、経済が安定しているため大きな影響を受けてない。

2009年内モンゴル観光業は国祭金融危機と疫病（豚インフルエンザ）の影響を克服し、入境旅游客大幅に下がった状況で急速な発展した。全年旅游総収入 611.35億元、前年と比べると30.4%増加したが、入境旅游客人数 128.96 万人 16.8%下がり、外貨収入 5.58 億ドル 3.3%下がった。

2010 年内モンゴ旅遊外貨収 6.02 億ドルになり、前年より 7%増加した。旅遊総収入 732.7 億元で、前年と比べるとそれぞれ 19%増加した。

2012 年旅遊外貨総収入は 7.72 億ドルになった。

2013年には内モンゴル旅遊総収入1403億元に到達し、旅遊客総人数161.5万人に達したが、内モンゴルの草原生態環境は深刻に破壊され、観光従業員は素質の高い人材が不足でおり、観光業の指導者になれる者はいないことと観光客に向けの製品が少なくて、地域や地方の特徴がないことでどこでも同じものであり、内モンゴルの観光市場の需給矛盾はますます突き出し、観光客は内モンゴル観光業の満足することができなく、興味が下がる一方で、観光客の滞在する時間が短くて、個人消費額どんどん減り、二度来ることが引き込むことができない事が事実ある。その他観光地域や地区で比べると内モンゴルの観光業に多様な問題であった。

４．エコツーリズムによる観光振興

（１）エコツーリズムの意義

エコツーリズムを進めることにより、以下のような効果が期待できるであろう。

エコツーリズムが従来の観光形態と異なる重要な点は、旅行者に自然の中での自己存在を気付かせるなど、自然と人との関係に関する意識の啓発をもたらす効果が大きいという点である。自然や歴史、文化資源と接し、その地域固有のゆっくりとした時間を過ごすことは、風景を眺めるだけの急ぎ足で通過する従来の観光旅行では味わうことができなかった、深いふれあいを可能とする。五感のすべてを使うことにより自分が自然の一部であることを感じたり、自然に心身を癒される感覚を味わったりすることができるのもエコツーリズムの醍醐味であると言える。このような体験は人と自然、歴史、文化とのかかわり方を振り返ると同時に、人間自身、自分自身のあり方についても、改めて考える機会となるといえよう。楽しい体験を通じ、いつまでもこれを続けるにはどうすればいいかを考えさせることが、エコツーリズムの１つの役割であるといえる。エコツーリズムを継続していくためには、対象地の自然が破壊されたり、開発されたりして失われることがないよう、法的制度により保護対策が取られていること及び、常に自然の保全が行われている対象地の存在が大事である。

（２） 住民意識の予備調査結果

庫倫旗においてエコツーリズムの推進を図るための課題を把握することを目的とした意識調査の予備調査を 2015 年 8～9 月に庫倫旗住民および観光客 30 名を対象として実施した。

調査項目は、自然環境に対する関心度、自然環境の保護や破壊に関する意識のほかに、エコツーリズムに対する考え方も加えている。

自然環境に対する関心度は比較的関心があるまで含めると 93%に達した。

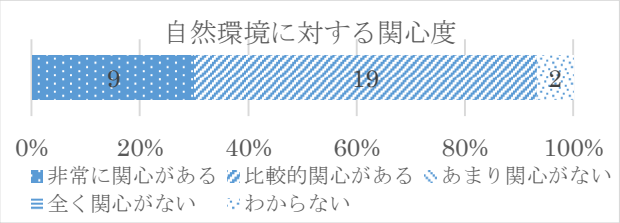
自然環境の保護の必要性では、「野生生物の保護」と「人類の生存」をほぼ半数が選択した。

自然環境破壊の影響では、「健康に対する影響」を 77%が、「気候」「牧畜・農業」をほぼ半数が選択しており、「観光」や「文化」の選択は小数であった。

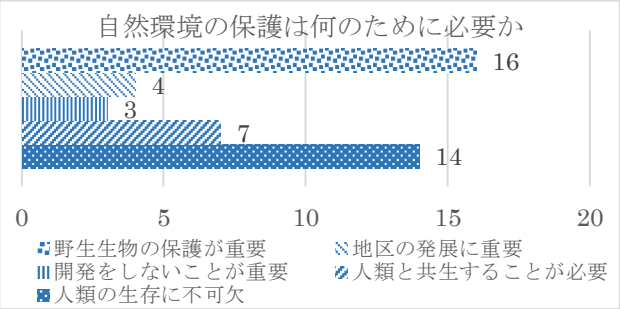
自然環境保護の方法では、「自然保護を図るべき場所の調査研究」が半数以上となり、「都市内緑化推進自然再生」と「破壊された自然の復元」が２割程度であった。「観光と自然環境の調和」は選択されなかった。

自然環境を保護するための心がけでは、半数が「森林破壊を減らす」を選択しており、次が「家畜を減らす」で三分の一が選択した。

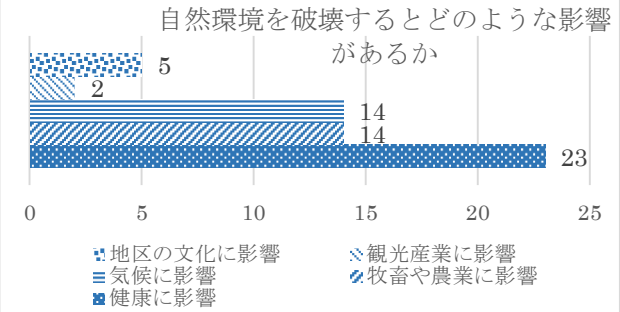
エコツーリズムについて最も近い考え方は「自然環境の保全」が７割以上を占め、持続可能な観光は僅か７％であった。



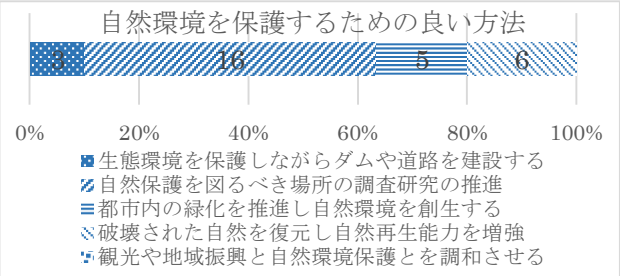
図－４　自然環境に対する関心度



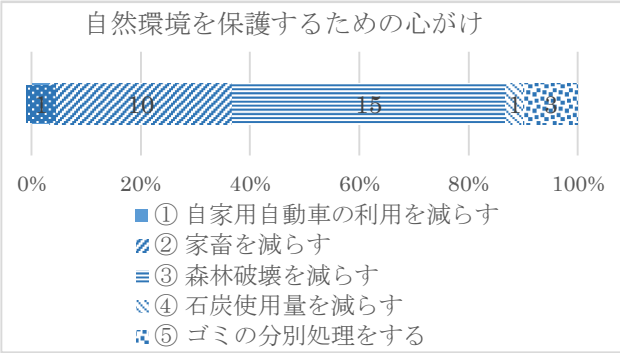
図－５　自然環境保護の必要性



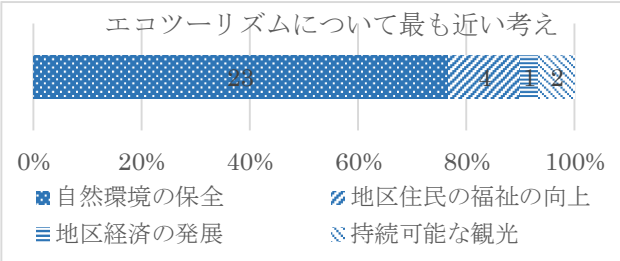
図－６　自然環境破壊の影響



図－７　自然環境保護の方法



図－８　自然環境保護の心がけ



図－９　エコツーリズムに対する考え方

調査票の収集数が少ないものの、自然環境保護に対する関心や自然保護意識の高さが窺われた。これらの結果から、エコツーリズムの意義や役割をさらに周知していく必要性があることが判った。

５．通遼市庫倫旗を事例としたエコミュージアム適用の可能性

（１）エコミュージアム適用の意味

エコミュージアムは、庫倫旗においても豊かな資源を構成要素として、地域に学び、将来を探求する。産業を育て、観光を振興する。生活や環境を守り、育て、未来につなげる。住民の活動を支援する、都市と農牧民との交流を進めるなど、新しい発想の地域づくりとして、様々な方向で展開が考えられる。内モンゴルで整備された場所としての自然ではなく、ありのままの自然地、原始的自然でのエコミュージアムの発展が十分に可能であると考えられる。現代、都市化が進行する中で、自然性の高い地域で本物の自然に直接触れ感動を得ることは、人間性を回復し、自然を大切にする心を育つ上で極めて重要である。

（２）庫倫旗におけるサテライト候補地の検討

a）庫倫大沙漠

内モンゴル庫論大砂漠は赤峰と通遼市の間、塔敏査干砂帯と呼ばれ、以前は大草原だった。庫論砂漠は東西長４６０キロメートル、幅５キロメートル、東北の最大大きな砂漠で、八百里砂漠の海と呼ばれる。

b）蓮池

庫倫鎮西の哈日高村（ハーロゴソン）から２１キロメートル離れている所にあり、「白音吉如和沟」（バインキルホコウ）と呼ばれている。１０年前自然に蓮花が咲いて、付近の村の人達が管理して７～８年になっている。

乾燥気候の草原の中に蓮池が忽然と姿を現すと、異様な驚きを感じさせる。池の大きさは季節によって異なるようで、増水した時のための排水口も確認された。住民によって管理されていることであるから、まさに地域の宝物としてエコミュージアムのサテライトに加えることがふさわしいといえる。

c）庫倫三大寺

庫倫三大寺は内モンゴル自治区庫倫鎮の中心にある興源寺、福縁寺、象教寺のことでラマ教の寺院である。興源寺は清朝の順治6年（1649）に建立されたチベット風ラマ寺院で、福縁寺は乾隆7年（1742）に建立され、山門、仏殿、舎利塔などが文革で破壊されたが、現在修復されている。象教寺は山門の中に無料量仏殿等がある。これらは、一般観光客に開放されており、歴史的遺構としてエコミュージアムのサテライトに加えることが望ましいように思われる。ただし、宗教施設であることには変わりがないのであるから、信者がお参りをする機会は尊重されるべきであり、その意味では観光との調和を図る必要があるだろう。

d）蕎麦

「中国蕎麦の郷」として庫倫旗は地理、気候、土質などの条件が蕎麦の生産にとても適しており、庫倫旗の主要穀物である。全旗の毎年の蕎麦栽培面積３５万ムー（３４７１ヘクタール）以上、その生産量はおよそ全国の４分の一である。見た目には日本の蕎麦と全く違いがないが、食べる方の違いがある。ところで、フランスのエコミュゼでは、ワイン醸造所をサテライトにして成功した事例が報告されているが、庫倫旗では食をキャッチフレーズにして、蕎麦道場をサテライトにしてみることを考えたい。

写真－１　庫倫大砂漠

写真－２　庫倫蓮花池

写真－３　興源寺

写真－４　象教寺

写真－５　福縁寺

写真－６　蕎面（そば）

参考文献

1) 内蒙古自治区交通図冊、内蒙古自治区地図制院編制、中国地図出版社出版発行、2007.7北京印刷
2) 庫倫旗人民政府公式ウェブサイト：http://www.kulun.gov.cn
3) 内蒙古経済信息网http://www.nmg.cei.gov.cn/
4) 内蒙古統計局http://www.nmgtj.gov.cn/nmgttj/index.htm

（？受付）

The current state and problem of eco tourism in Chinese rural area
- Case study of Kulun City in inner Mongolia -

A RI GUN and Tetsuo KATO

This study aims to consider the plan to promote eco-tourism, by use of case study of Kulun City in inner Mongolia. A questionnaire survey was done in Kulun city to grasp a possibility of the eco-tourism on September in 2015. In this paper, consideration in a satellite candidate site of an ecology museum system is being tried as an example of a plan.